
LOVE GATE

かつよし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LOVE GATE

【Nコード】

N7922H

【作者名】

かつよし

【あらすじ】

初恋って、こんなにもドキドキしたり、悩んだり、そして、もの凄く傷ついて・・・人は変わってしまうし、変わるものでもある。一途な恋と新たな恋、どちらを選べばいいのだろうか？

First Love

「愛美あみ、待ってよ、一緒に帰ろ」赤いランドセルを上下させ、右手を振りながら走ってくる女の子。友達の朝倉沙織だった。

「どうしたの？沙織・・・」

「はあ、はあ・・・ねえ愛美・・・聞いた、谷崎くん的事」

「谷崎くん・・・どうしたの？」

「ほかの男子が話してただけで、転校しちゃうんだって」

「えっ？ほんと・・・」

「チヨ、シヨック！」沙織は口を尖がらせ、体を左右に振った。

「ねえ愛美？」覗き込みながら「愛美も谷崎くん・・・かつこいいと思うでしょ？」

突然の質問に「えっ？・・・うん」なぜか顔が熱くなるような感じがした。

「だよね！だよね！谷崎くんってやつぱあかつこいいよね」

沙織がなぜこんなにはしゃいでいるのか、それになぜこんな話をするのか、愛美は不思議に思った。

「それでね愛美・・・ほかの女子もさあ、谷崎くんのこと好きな子がいてね、転校する前に何とかしないとって言ってたんだ・・・特に、雅子と由香里・・・あの二人、チヨ盛り上がった」

「うっ、うん、そうなんだ」

「私たちも何とかしないと・・・そうでしょ？愛美！」

「えっ・・・私も・・・」

「そうだよ愛美、負けてらんない！」

”わたしはいいよ”と言いそうになったが、沙織の目があまりにも真剣だったので、言えなかった。

「ねえ、ねえ、それでね！考えたの・・・プレゼント大作戦く！」
沙織は片手を突き上げ叫んだ。

沙織はいつも明るくて皆と仲良くお喋り出来る、それに引き換え

この私は、一人じゃ何も出来ない。沙織が羨ましいぜいましい・・・

「愛美、何がいい？プレゼント」

「えっ、うーん」 私にはよくわからない。男の子にプレゼントなんて・・・”

沙織はその後、テンション高めで、谷崎くんの事で一人盛り上がっていた。

私はただ、沙織の話を聞くだけだった。

「愛美〜！お昼食べるの〜」下階から母が呼ぶ。

「いらな〜い！沙織たちとハンバーガー食べるから」二階から降りる途中で答えた。

台所で昼の支度をする母と、ソファアに寝転びテレビを見ている父。

母の横に立ち「ねえ、ママ・・・お小遣い頂戴・・・引越す子にプレゼント買いたいの・・・」

「この前あげたでしょ」

「だって〜、みんなプレゼントあげるから・・・それにお小遣いだけじゃ足んないよ」母に甘える愛美。

「パパから貰いなさい」

「え〜っ、だって〜」ちらっと父を見る。

娘と妻の会話は当然、父にも聞こえていたのだろう、ソファアに横になりながら話に割り込んできた。

「愛美・・・プレゼント買うのか・それって、男の子か？」

「えっ・・・別にいいじゃん、そんな事」顔が少し熱くなった。

「おっ・・・赤くなったな！その子のこと好きなのかなあ」

「ちっ・・・違うよ」

「やめなさいよ、パパ」ちよつとイラつとしながら母は父を叱った。叱られた父は、ソファアで少し小さくなった。

いつも一言多い父だが、嫌いじゃない。母よりもいろいろ話をし

てくれる。

母も好きだけど、なんだかあまり面白い話をした事がない・・・などと考えている場合ではない。待ち合わせの時間に遅れてしまう。父に跳びつき「おねが〜い、パパ〜、お小遣い頂戴」父に甘え、やっとお小遣いゲット！

急ぎ家を出て駅へ向かう。

駅へ向かう途中、前から同級生の男子3人が歩いてきた。

運動万能、坊主頭の石岡竜也とクラス一の秀才、川上友晴・・・そして・・・

”谷崎建志くん？”愛美は俯き、少し早足になっていた。

そんな愛美に気付いた石岡が「おっ、佐々木じゃねーかよ、どこ行くんだ？」

下を向いたまま「えっ、ちよつと・・・」ちらつと視線を上げると、谷崎くんと目があつた。

その刹那、顔がカーと熱くなり、走ってその場を離れた。

「なんだよ、あいつ・・・」走り去る愛美の後ろ姿を追いながら、石岡が呟く。

そしてもう一人、谷崎も愛美の後ろ姿を見ていた。

そんな二人を見ていた川上が「あれー？お前ら佐々木の事、好きなんじゃねー？」

「はあー？ばつかじゃねーの・・・あんな暗いやつ・・・なあ！ザツキー（谷崎のあだ名）」

「おっ・・・おっ、そうだな・・・好きなわけねーよ」「早く行くうぜー！」

三人は歩きだした。そして、後ろを歩く谷崎は、ちらつと振り返り、愛美の後ろ姿を見た。

駅前で待ち合わせをしていたが、まだ来ていない。

とりあえず5分前には付いたが、たぶん沙織は遅れてくるだろう。いつもそうだから・・・

「愛美」名前を呼ばれ振り向くと、私と沙織と仲良し3人組の一人、松本優奈、通称ユウユが来た。

「ワオッ！びっくりにとうちゃくく！なのだ。・・・やிரいー、さっちゃん来てませくん、はい遅刻」ユウユはなぜか嬉しそうだった。と言うのも、沙織はまず時間通りに来た事がない。そして、そんな沙織を弄るのがユウユの楽しみらしいのだ。

待ち合わせ時間に遅れること十五分・・・慌てるでもなく沙織がやっとなってきた。

「おまちどうさま！」沙織が遅れて来ての第一声・・・いつもの事だ。「さっちゃん、遅い・・・？あれ、今日はお化粧が厚くありませんか？おばさんだからかしら」さっそくユウユが沙織を弄り始めた。確かに・・・小学生のくせに沙織はいつも、軽く化粧をしている。でも、今日はいつもより濃い。

「あら失礼な、こんなピチピチギャルに向かっておばさんだなんて失礼ですことよ」

沙織はたぶん、うちのクラスの中では一番のおませさんなのだろう。

一通り、ユウユの沙織に対する弄りも終り、駅前のデパートに入ってしまった。

私は、沙織とユウユといると、なぜか落ち着く。友達だと思っっているからだけじゃなく、二人を見ているだけで楽しいし、気を使わなくていいから。それに、私に無いものを持っているから・・・たぶん・・・

小学生でも、買い物は楽しい。今日の目的以外の事で随分盛り上がっていた。雑貨屋に入れば、髪留めやら、ぬいぐるみやらでキヤーキヤー騒ぎ、洋服を見れば似合うとか変だとかで言いあったり、時間はあっという間に過ぎていった。

結局、今日のメインの目的は二の次になったような気もするが、何とかプレゼントも買い、無事に帰る事になった。

夕焼け空がとてもきれいに見えた。そんな事、あまり思ったことなかったのに、今日はなぜだか感傷的になっていた。

プレゼントの袋を、振り回しながら帰る二人を見てみると、なんだろう、この二人？谷崎くんの事って本当に好きなのかなって思う。私は・・・今まで好きとかって考えた事もなかった。いや、好きになっても仕方がないって思っていた。自分に自信が持てなかったから・・・だから、あまり意識もしなかった。確かに、沙織の言うとおりに、かつこいいとは思っていたけど、でも、沙織に谷崎くんの事話をしているうちに、何だろう？意識してからというもの、谷崎くんの事を考えただけで胸が苦しくなる。こんな経験って初めてだ。”私・・・谷崎くんの事、好きなのかなあ・・・でも、もうすぐ引越ししちゃうし”

プレゼントを抱える両手が、いつのまにかそれを強く抱きしめていた。

その中に入っている物は、私が持っている物と同じ柄で、色違いのマフラー・・・だった。

「・・・愛美・・・愛美ってばあ」名前を呼ばれ、ハッと我にかえる。

「どうしたの？いつも静かだけど、今日は特に静かよ」ユウユがこちらを見ながら聞いてきた。

「うっくん！なんでもないよ」

「あつ、わかつた」谷崎くんの事考えてたでしょ。愛美、そんなに谷崎くんの事好きなの？」沙織がなぜか楽しそうに聞いてきた。

「そんなんじゃないよ」顔が赤くなっていくのがわかる。だが、赤面した顔は、きつと夕日に染まり、わからなかったにちがいない。

そして坂の下に着き、ここで3人は分かれる。

「じゃあ！明日ね！バイバイ！」

「バイバイ！」

「じゃね〜！バイバイ」

三人三様、手を振り、それぞれの家へ帰った。

私の家は、この坂を登りきった先にある。

なぜか、さみしい・突然、坂を登る足が止まり、今登って来た坂を、訳もわからず下っていた。

太陽もだいぶ沈み、寒さが増してきた。

「ここは？」いつの間にか谷崎くんの家の近くまで来ていた。

”私・なにしてんだろう”自分の行動が理解できなかった。

街灯も灯ったが、まだ完全に陽も落ち切っていない為、街灯の明るさを実感する事は出来ない。

すると、向こうから誰かが来る。なぜか恥ずかしい・急ぎ路地の陰に隠れた。

向かってくる影は、谷崎くんだった。

心臓の鼓動が速くなる。

覗き見ている先に、谷崎くんがいる。でも、何も出来ない・ただここで見ているだけ。

そして、谷崎くんは家の中へ消えていった。

隠れていた自分に、もの凄く罪悪感を感じながら、しばらくその場を動く事が出来ないでいた。

陽も沈み、ますます寒さが増す中、家へ向かう足取りは、凄く重かった。

そして、自分で自分の事を罵った。^{のち}”バカな愛美・愛美のことなんか好きじゃないよ”って・

涙は出てこないけど、悲しくて悲しくて仕方がなかった。

翌朝、私は熱を出し、学校を休んでしまった。

熱でクラクラしながら、学校へ行かなくてもいい事に、ホツとしている自分がある。

自分の意志とは別に、想いがどんどん大きくなっていく事に、戸惑いを感じながら”私、まだ子供なのに・私、まだ大人になっ
ていないのに・どうして”白い天井を見つめるだけの私。

沙織やユウユや皆みたいに騒げれば、こんな想いしなくていいの
にと思った。

もうすぐいなくなる事はわかっている。だから、彼への想いが大
きくなってしまუნだろうか？

わからない・・・なんで好きになっ たんだろう？

突然、涙が一粒だけ流れた。

夕方、沙織とユウユが学校からの印刷物などを届けてくれながら
お見舞いに来てくれた。

熱はすっかり下がったが、心の熱は益々上がっていた。

「愛美・・・大丈夫」元氣のない愛美に優しく声をかける沙織。

「うん、大丈夫」

「明日は学校これるよね」ユウユが聞く。

「ねえ愛美、プレゼント明日渡すから、忘れないでね」

「えっ！明日？・・・」確かに、渡すために買ったプレゼントだが、
本当に渡していいものか？

心が折れそうなくらい重くなった。

沙織とユウユも帰り、一人ベットで明日の事を考えるだけで、ま
た熱が上がりそうだ。

「どうしよう・・・私なんか、全然だめ」また、熱が上がってきたみ
たい・・・もう、どおしたらいいかわからない。頭から布団をかぶり、
そのまま、布団の中で丸くなった。

目が覚めた。天井には常夜灯のオレンジの明りで、室内がやさし
い光で照らされていた。

上半身を起こしてみると、背中にパジャマが汗で貼り付いていた。
時計の音が、カチ・カチと鳴っている。

汗でベトつく額に手を当ててみると、手の暖かさが伝わってくる。
・熱はなさそうだ。

あれ？いつのまにかパジャマが変わっていた。そういえば、意識が朦朧とする中、ママが着替えさせてくれていたようだったが、あまりハツキリと覚えていない。

勉強机にある袋に目が止まったり、「はぁー！」と溜息が出た。

ベットから抜け出し、花柄のピンクのカーテンを少し引き、窓を半分だけ開けてみる。

夜の外気が、火照った体を冷ましてくれる。軽く深呼吸してみると、冷気が肺を満たし、細胞の一つ一つを活性化してくれるようだ。った。

高台から見下ろす町並みの、たった一か所に視線を置く。あの辺は、谷崎くんの家があるところだ。

暫くして、寒さが身に沁み込むのを感じ、窓を閉め、カーテンを引き、ベットへ潜りこむ。

「寒い・・・汗をかいた体を、急に冷やしたから無理はないだろうが、その行為自体、情けない自分への戒めだと思った。

この想い・・・朝になれば、また自分を苦しめるに違いない。ならばこのまま朝が来なければいいと思った。

だが、日は登り、朝は訪れる。

天井を見つめる視線は動く事はなかった。

カチャッ！ドアが開く音がした。咄嗟に目を閉じ、寝たふりをする。

母が入ってきて、額に手を乗せた。

「愛美・・・愛美」母はやさしく私の名を呼ぶ。

「うん？」今起きたような素振りを見せ、目を開ける。

「熱は下がったみたいだけど、どうする？今日も休む？」

「うん！」無意識に答えていた。

「そう、じゃあ後でおかゆ作ってくるからね」と言い残し、母は部屋を出ていった。

”ママ、ごめんね” 自分の弱さが母に対して申し訳なく思えて仕方なかった。

そして、目を閉じ、沙織とユウユに対しても、心苦しい思いでいっぱいになった。

熱も完全に下がり、元気そのものだった。何をするわけでもなくベットで過ごさなければいけないとは、何と退屈なのだろう。

今日は沙織もユウユも来なかった。

「は〜あ・・・約束してたのに」悩みが一つ増え、益々気が重い。

連絡しようかどうしようか迷っていたが、夕食を済ませ、沙織に電話を試みることにした。

テウルルルル・テウルルルル・ガチャツ！「はい、朝倉です」沙織の声だった。

「もしもし・・・愛美です」

「あつ！愛美、大丈夫！」

「うん、ごめんね・・・」

「愛美、ちようどよかった、聞いてよ」と沙織は一人話し始めた。

それによると、愛美が休みだからプレゼントは愛美が来てからということになったが、雅子と由香里が谷崎くんにか何か渡すところを見てしまい、これはいけないと思い、愛美に悪いとは思ったが、谷崎くんにプレゼントを渡したということだった。

ところが、谷崎くんたら、鞆にいれるなりとつと帰っちゃったということらしい。

「ねえ愛美、ひどいと思わない・・・喜んでくれると思ったのに、なんかがつかり」

「そうなんだ」とりあえず、沙織との仲は、ギクシヤクしなくて済みそうだ。

その後も、沙織の愚痴を聞き続け、やっと電話を切る事が出来た。沙織との電話で、少し気が晴れたような気がする。谷崎くんはきっと、私の事なんかなんとも思っていないだろう。そう考えたら、今

まで悩んでいた自分が何だかバカみたいに思えてきた。
なんとなく元気になっていく自分がそこにいた。

翌日、学校に着くと、いつもと同じ風景なのに、なぜか新鮮味を感じた。二日間学校を休んだ事と、胸の痞えが少し無くなったからだろう。

谷崎くんを見つけたが、今までのようなドキドキは無くなっていた。

自分の席に着き、ランドセルから教科書、ノート、筆箱を机に詰め始めた。

「愛美・オハヨー」ユウユだった。

いつもと変わらない会話で今日の学校での一日が始まる。

チャイムが鳴り始めた時、廊下を走ってくる音と共に、先生の怒鳴る声があった。「こらあー朝倉ーあ、また遅刻かーあ」

教室の後ろのドアが開き、息を切らしながら沙織が入って来るなり、両手を広げて、セーフのゼスチャーをした。

その日のホームルーム。

「はい、皆知ってると思いますが、谷崎君がもうすぐ転校してしまいます。だからそれまで仲良くしましょー」という話だった。

なぜだろう、女子たちの反応が、冷めている。何かあったのだろうか？

そして、下校の時間となり、沙織とユウユと帰ったが、谷崎くんの話題は一つも出てこなかった。今までの事が、夢の中の話のようだった。

数日後の日曜日、谷崎くんが引越す日が来た。私は、ベットに座り、机の上の袋を見つめていた。結局、プレゼントを渡せず、そのままの状態が残っていた。

「どうしよう？」と思いながらも、以前よりも冷静でいられる自分が、なぜか不思議に思えた。

いつの間にか家を出て、坂道を下っていた。右手にはプレゼントの入った袋が握られている。明日からもう会えないと思ったとたんの行動だった。

まさか自分一人で行動するなんて、夢にも思っていない事だったし、それがなんだか嬉しかった。

ちよつと浮き浮き気分だったが、だんだん家に近づくにつれ、緊張してきた。

「わっ、どうしよう」その角を曲がるともつすぐだ。

そつと角から覗いて見る。引越社のトラックが、家の前に止まっ
ていて、荷物の積み込みも終わっているようだった。

谷崎くんの姿を見る事は出来ない。そしてどんだん胸の鼓動が大
きくなつていく。

「佐々木・・・？」突然、後ろから名前を呼ばれ、びっくりして振り
返ると、そこに谷崎くんがいた。

その刹那、一気に顔が熱くなり、心臓が破裂しそうになった。

「なにしてんの？」

なんて言ったらいいのかわからなかった。

「佐々木・・・君家に今行ってたんだよ」

「えっ？」耳を疑うような言葉だった。

「どうして？」

「あの〜これ・・・」愛美の目の前に差し出された物があつた。

「なに？」訳がわからず、戸惑いを隠せないでいる。

袋を手渡された。そして「開けてみて」と言われた。

言われるまま袋を開けてみると、中からマフラーが出てきた。そ
れも、プレゼントしよとした同じマフラー・・・いったいこれは・・・？

「朝倉たちに聞いたんだ。それで、お揃いの物を持っていたくてさ

あ

「あつ、ありがとう・・・でも・・・どうして・・・」

「おれ・・・佐々木の事・・・前から・・・好きだった」

愛美は何と言われたか理解できなかった。頭の中は????のマー

クしかないし、声を出す事も出来ない。

「今日で引越しちゃうけど、佐々木の事、絶対に忘れないから」

「・・・」愛美はまったく反応出来ない。

突然、我に帰り「谷崎くん！」

”自分のプレゼントを渡さなくちゃ！”袋を彼の胸に押しつけた。

「これ、私から・・・中身は同じだけど・・・」

「ありがとう、もう行かなくちゃ」

「私も・・・私も、谷崎くんの事・・・好き・・・だったよ」そう言いながら、無意識で彼の手を握り、その腕に縋っていた。

「ありがとう・・・私も谷崎くんの事、絶対に忘れない」見つめる彼の目・・・それが段々と近づき、彼の唇が自分の唇に、そっと触れた。ほんの一瞬の出来事だった。

何が起こったのか？・・・目の前には彼が手を振りながら離れていく姿と、それに応えている自分がいる。なんで手を振っているのか意味がわからないくらい頭の中は真っ白になっていた。

唇に残るほんの僅かな感覚。時間がゆっくりと流れているような感覚の中、角を抜け、彼を見送っていた。

見上げると、雲ひとつない澄んだ青空が広がっていた。

そして、涙が頬を伝わり落ちていった。

あれから7年・・・私は大学生になった。

Second Love?

年々、桜の開花時期が早まり、入学式当日も、ほとんどの桜は散り、葉桜になっていた。

私も、今年から大学生になり、新たな想いを胸に、大学の門を潜る。

ちょっと前までは、女子高に通う普通の高校生だったから、まだまだ、高校生気分が抜けないが、これからの4年は、社会に出るための大事な4年・・だと思う。

ここでの最初の2年は、郊外にある校舎のため、親元を離れて大学に通い、後の2年は実家から通えるようになる。

初めての一人暮らし、不安と期待が半々で、私の事だからホームシックになっちゃうかも？

でも、これもいい経験になるから頑張る〜！

「よし！」自ら気合いを入れ、一歩踏み出す。ガッ！（エツ・いきなり躓いた）

「ほら愛美、早く来なさい」付き添いで来ていたママは、私より先を歩いていった。

そんなママも普段とは別人のように、着飾っている。

（ちょっと化粧が、濃いんじゃないの）と思いながらも、娘の入学式だから仕方がないのかなと思った。

ちょっと周りを見回す。ユウユもどこかにいるはず？

松本優奈「ユウユとは小学校からの付き合いで、中学、高校、そして大学もいっしょになった。

顔見知りか一人いるだけで、少しは心強い。

（ユウユ・どこ？）ただ、入学式だけに、こんなに人が多いと、なかなか探すのは困難だろうと思った矢先、携帯電話がなった。

ユウユからだった。

”もしもし、愛美・・いまどこにいるの”

「今、校門のところだよ」

”わたし今、講堂の入口にいるから、早く来て・・何だか心細いよ”
「うん、わかった、私も心細かったから、ユウユ探してたんだあ」
携帯電話を切り、急ぎ講堂へ向かう。

入口の側でユウユが手を振っている。その隣に、ユウユのお母さんもいた。

両方の親子で挨拶を交わし、4人は講堂へ入る。

なんて広い講堂なんだろう。高校までの講堂とは全く違う。まるでコンサートホールのような講堂に驚きを隠せない。私もユウユも周りをキョロキョロと見回してしまった。

さらに驚いた事は、こんなにも新入生が多いなんて思ってもみなかった。

そんなこんなで、入学式典も無事終了、4人で食事をする事になった。

周りにはまだまだ新入生が大勢いる。そして、部活やサークルの勧誘も五月蠅いほど盛り上がっている。

「愛美・サークルとかってどこに入るつもり」

「えっ、どうしよう・・まだ決めてないよ」

「そう、わたしは、やっぱ、テニスかな、テニスサークルって王道だよな」

「そうなんだ・・」

そんな会話をしながら歩いてみると、入学式とは程遠いような格好をした男女の集団がいた。

式典会場のあちらこちらで見かけた、チャラけた格好の人たちだ。どうやら、最初からの知り合いではなさそうだ。たぶん、ナンパしたり、されたりの人たちだろう。私はこの人たちの事を好きにならない。外見で人を判断するのはよくないとわかっているけど、なぜか許せない。しかし、私には関係ないことだ。

その集団の横を通り過ぎようとした時、一瞬、耳を疑った。

(谷・・崎・・) そう聞こえた。私は咄嗟に振り向き、探してしま

った。

ロン毛の髪を染め、耳にピアス、ネックレスに指輪は当たる前、サングラスをかけた者や帽子やキャップを冠っている者、先の尖がった靴を履いてる者、様々な格好をしているその集団の中に、まさか？・・・きつと、聞き間違えだろう。こんな人たちの中にいるはずはない。

「愛美、どうしたの？早くいくよ」とユウユにほだ絆され、ママたちを追った。

大学の近くに、何軒かファミリーレストランがあるが、みんな考える事は一緒らしく、どこも混んでいたが、他を探すのも面倒なので待つ事になった。

私は、待っている間も、食事の間も、外を歩く学生が気になって仕方がなかった。

凄く動揺している。本当に聞き間違えたの？（谷崎くん？）忘れようとしても忘れられない名前。気にしないようにしていたのに・・・今になってなぜ？

「愛美・・・さつきからどうしたの？なんか変だよ」

「えっ？あつ、なんでもないよ、ちようと疲れただけだよ、きつと」

「そつ、そうだよね、なんか退屈だったもんね」

親の前で、男の話なんか出来るはずもない、しかもこれから一人暮らしするのに・・・とにかく、そんなことは忘れて、明日からの学生生活を満喫できるように頑張らないといけないと思うようにした。

そして、食事も終り、母たちとバス停で別れた後、ユウユは私の部屋に来た。

そこそこ築年数の経ったマンションだが、部屋は日当たりが良い綺麗なワンルームで、ほとんどの部屋の住人が大学生と聞いている。ユウユはここから10分ほど離れたアパートに部屋を借りたという

事だったが、まだ部屋は片付いていないらしい。

小さいテーブルに、途中で買ったスイーツを並べ、話に夢中になっているうちに、日も暮れ、辺りはすっかり暗くなっていた。

そろそろユウユも帰るといふ事で、マンションの入り口まで送り、外へ出てみると、昼間の暖かさはどこへやら、ヒンヤリとした空気が漂っていた。

そして、別れ際、ユウユが何か心配そうな顔をしていたのに気がつき、尋ねてみる。

「なんか浮かない顔してるけど、何かあった」

ユウユは何か迷っているような素振りを見せながら「愛美・・・あのね・・・」

その後の言葉が続かない。

「どうしたの？」

「ううん、何でもないの・・・また今度ね・・・じゃあ、お休み」

「えっ、なにになに？どうしたの」

「うん、大したことじゃないから・・・またね」と言い残し、ユウユは暗い道へ消えていった。

私は、その後、気になって仕方なかったが、無理に聞く訳にもいかず、大事な事なら後で話してくれるだろうと思い、部屋へ戻った。

その夜、なかなか眠れない。ユウユが何か言いかけた事、いったい何を言おうとしたのか？それに、谷崎という名前を聞いた事、谷崎という名前は、いない訳ではないけど、そうそう聞く名前ではないはずだ。でも、彼は遠くで暮らしているはずだから人違いだろう。でも気になる。今、どうしているんだろうか？

あの日、最後に会った時、あの唇の感触を今でも覚えている。

その後、暫くは手紙のやり取りをしていた。高校に入り、携帯電話を持った時から頻繁にメールのやり取りをするようになり、お互いの気持ちを伝えあった。でも、一度も会えた事はない。何しろ、谷崎君は、日本にいなかったから・・・そして、高校3年になったある日を境に、ピタッとメールが来なくなった。

もう忘れるしかなかった。それ以外どうしようもなかった。私は受験に打ち込む事により、なんとか忘れる事が出来た。でも全てを忘れられた訳ではないが、くよくよと悩む事はなくなった。

なにか不安を感じる。それに、沙織の事も気になる。何年会っていないだろう、高校が別になっても、暫くは会っていたのに、突然、会わなくなった。

もう考えれば考えるほど訳がわからなくなってくる。どうしたらいいんだろう。

夜は益々ふけていく。そしてまた朝は来る。

数日後、大学構内を歩いていると、大きな笑い声とともに、数人の生徒がベンチを占領して騒いでいた。あの時、入学式の時に見かけた人たちだった。

私は目を逸らし、なるべく近寄らないように校舎へ向かおうとした。だが、その中の一人が、ずっと私の事を見ている。私は怖くなり、その場をすぐ離れようとしたその時、その人がベンチから降り、私に向かってきた。

「いや！どうしよう」走って逃げようとした刹那、前を塞がれ、顔をジロジロ見られた。

「ねえ、彼女・・・かわいいじゃん、遊びに行かない」

「だめです、これから授業だから・・・」

「いいじゃん、いいじゃん、なんなら代返頼んでやるからさあ、ねえ、いいでしょ」

「おい、なにしてた」仲間が二人寄ってきた。

「おおっ、なかなかかわいいじゃん、ねえねえ、俺たちと遊ばない」

三人に囲まれ、どうする事も出来ない。さらに、その向こう、この人たちのグループの一人がずっとこちらを見ていた。雑誌の男性モデルといってもおかしくないぐらいの格好をしていて、このメンバーの中で一番目立っている。少し大きめのサングラスをしてい、表

情を窺い知る事は出来ない。

(怖い！誰か助けて・・・) 心の中でそう叫んでいた。

「ねえねえ名前、なんつうの」

「なんかこう、擦れてないっつか、いいねー、俺と付き合っちゃう」
まわりの生徒は皆、見ぬ振りだった。

「君たち、止めないか」突然、後ろから声がした。

「嫌がつてる者になにしてるんだ。授業が始まるぞ」それは、私が取っているゼミの准教授の坪田先生だった。

絡んでいた3人は気まずそうに私から離れていった。

(助かった〜) ホツと胸を撫で下ろし、先生に頭を下げ「ありがとうございますごさいました。」とお礼をいった。

「大丈夫かい、君」とやさしく声をかけられ「はい、だいじょうぶです」と答えた。

「あれ、君は確か・・・私のゼミにいるよねえ・・・え」と、佐々木君・
・だったよね」

まさか、私の名前を覚えてくれたなんて、なんか嬉しくなった。この坪田先生のゼミは特に人気があり、生徒数も多い。目鼻立ちもすつきりして、すごく爽やかなかんじの30歳後半の人気のある先生だ。特に女子には人気がある。

「さあ、君も急ぎなさい。授業におくれちゃうよ」

「あつ、はい・・・ありがとうございます」また、お礼を言いながら、先生の後ろ姿を見送った。

私はなぜか嬉しくて、自然に顔が綻はなんでいた。

何気なく視線を横に移した時、さっきのグループの一番目立っていた人が、私の事をずっと見ていた。

(この人、どっかで?・・・)

授業も全て終わり、ユウユと大学で知り合った木之元優子、それに増田敦子の4人でファミレスでお茶をしていた。

私が今日の話をする、みんな羨ましがり、いろいろ聞いてきた。

やはり、坪田先生は評判がいい。それに引き換え、私にちよつかいを出してきたオチャラケ不良グループは、評判悪い。

いろいろ話を聞いているうちに、リーダー的存在の彼だけは、意外と人気があるらしいという事だった。

帰国子女で、英語はペラペラ、モデルもやっているらしい。

その仲間たちは彼の取り巻きで、彼の側にいれば女に不自由しないだろうと考えている輩連中だという事だ。

（私はそんな人たちとは関わり合いを持ちたくない）と強く思ったでも（また絡まれたら、坪田先生が助けてくれないかな）なんて事を考えたりもしていた。

私は何を考えているんだろう？バカみたい・・・でもなぜかニヤけてしまう。

でも、あの人、あのグループの人・・・なぜか気になる。なんで私の事をずっと見ていたんだろう。

return love

昼のランチを済ませ、私たち4人はそれぞれのゼミへ向かった。

私と増田敦子「アツちゃんは、一緒のゼミへ向かい、ユウユは午後の授業は無いので買い物をして帰ると言っていた。そしてもう一人の木之元優子「ユウはまた違うゼミへ向かった。

「ねえ愛美、そう言えば、坪田先生って独身らしいよ」

「そんでね、サークルの先輩から聞いたんだけど、彼女もいないみたいでさあ、それでね、結構いろんな生徒たちがアプローチかけるみたいなんだけど、ぜんぜん相手にしてくれないんだって・・・あたしにも少しは望みありかなあ？・・・なんてね」
嬉しそうに話すアツちゃんに、なぜか昔の記憶が甦る。

あの時、沙織に谷崎君の事を聞かされ、凄く意識するようになり、そして淡い恋心はいつしか思い出に変わった。

いくら恋愛音痴の私でも、あの時のように、訳もなく恋心を抱くほど幼稚ではなくなったと思う。

確かに、先生には何か惹かれるものはあるけど、単なる憧れに過ぎないと思うから。

「アツちゃん、いいんじゃない、がんばってみなよ」

「でもっやっぱ無理かなあ、なんかね、先輩で凄く美人の人がいて、先生に何度もアタックしたんだけど、ことごとく無視されたんだって」

「ええっ本当っ、もしかして先生って・・・あっち・・・」とオネエ系の仕草をした。

二人はその事で盛り上がりながら、校舎へ入っていった。

一方、一人買い物へ行くと言っていたユウユは、バス停にいた。

なぜか浮かぬ表情のユウユ。
しばらくしてバスが来た。

バスに揺られ、駅前のバス停に着いた。
しばらく待つと、黒のBMWがユウユの前に止まり、その車にユウユは急いで乗り込んだ。

運転席には、サングラスをした、あの不良グループのリーダーがいた。

ユウユはシートベルトをするなり、ちらつと運転手を見て「ねえ、本当にいいの？」と尋ねた。

「別にいいんじゃない！松本がそうしたいんだろ」

「でも、愛美に知られたら・・・」

「関係ないっしょ、昔の事なんだから」

「そうだけど・・・」

車は、勢いよく発進し、駅のロータリーを回り、ひと際大きな通りへ出て、グングン加速していった。

その少し離れた場所に、髪を脱色し、今風のメイクをしたギャル系の女がずっと佇み、様子を窺っていた。

「ユウユ・・・？」と呟き、女は駅の改札へ消えていった。

授業も終り、愛美とアツちゃん、それに後から合流したユウと3人で、お茶して帰るところだった。

アツちゃんとユウは自宅から大学へ通っていたので、愛美はバス停まで見送り、そのまま一人、マンションまで帰る事になった。

その帰り道、なぜか黄昏のような夕日を見ながら、昔の事がなぜか思い出され、ちよつとブルーな気分になった。

部屋に入ると、夕日の朱色が、部屋の壁を染めていた。

鞆を椅子に起き、ベットへそのまま寝転び、じつと天井を見つめる

だけだった。

その時、携帯のバイブレーションが、鞆の中から響き、それを取り出して見ると、見慣れない番号が表示されていた。

「・・・？誰」

知らない番号にはあまり出たくない。でも誰だろう？と考えているうちに電話は切れてしまったが、留守電に用件を入れなかったから、きつと何かの勧誘だろうと思ひ、そのまま携帯を置き、しばらくポロロとしていたところ、部屋はいつの間にか真っ暗になっていた。

「やだ、何してんだろう私ったら・・・」

ベットから立ち上がり、部屋の明りを点け、夕食の準備に取り掛かる事にした。ちなみに今日の献立は、豆腐サラダとパスタ、それにカップのコーンスープ、パスタはレトルトのクリームソースを和え、フライパンでほとんど半熟状態の玉子焼きを上に乗せた、オムレツ風パスタにしてみた。パスタは大好物なので、週2〜3回は作ってしまう。もっと栄養のバランスを考えなければと思ひながらも、ついつい好きな物を食べてしまう。一人暮らしは毎日好きな物を食べられるけど、栄養のバランスはきつと悪いんだろうなと考えながら、一人で舌をペロツと出し、おどけてみた。

月はだいぶ上まで昇り、ネオンの煌めきが怪しい雰囲気^{かも}を醸し出している一画に、ラブホテルが立ち並ぶその一棟から、黒のBMWが滑り出してくるところだった。

車はゆっくりと表通りに出て、一気に加速していった。

助手席から外を眺めているユウユの姿があり、運転席には例のグループの男が、じつと前を見据えたまま運転していた。

外を眺めたままのユウユが、振り向くでもなく話しかけた。

「私・・・このまま付き合ってもいいのかな？」

「・・・」

ユウユはそつと振り返り「私、愛美に言えなかった・・・貴方の事・

・愛美の気持ち、知っていながら・・・」

「もういいよ、こうして俺らは今、付き合ってたんだから」

「でも、私がちゃんと話してれば、ケンくんの隣に愛美がいたかもしれないんだよ」

「そんな事・・・いまさらあいつの気持ちを知ったって、もう昔の俺じゃないし、それはお前がよく知ってる事じゃねーか」

「そうだけど・・・」

「もういい、今日はこのまま帰るぜ!」

そして、黒のBMWは、車の少なくなった道を飛ばして帰って行った。

「オハヨー!」ユウとアツちゃんが、朝からテンション高めで隣の席に座ってきた。

「あれー、ユウユはまだ来てないの?」とユウが聞いてきた。

「うん、まだ来てないよ」

結局、ユウユは一限目に来なかったもので、二限目が始まる前にメールを送ってみたが、返事が返ってこないまま、その日は終わった。何時間経っても、返事が返ってこないなんて、始めてかも知れない。

私はもの凄く不安になってきた。まさか、ユウユまで私の前からいなくなっちゃうんじゃないだろうか・・・沙織の時のように・・・

沙織もメールの返事が返ってこなくなったとたん、音信不通になり、ユウユと二人で、沙織の家まで行ってみると、そこには誰も住んでいなかった。

友達だと思っていたのに、二人ともショックで、しばらく悩んでしまった事がある。

そんな過去があったばかりに、私は心配で心配で仕方がなかった。その日の夜も、なかなか寝付けず、結局、ほとんど寝れずに朝を向

かえてしまった。

ユウユに対して何かしたのだろうかとか、あれよこれよと考えが頭の中を駆け巡り、憂鬱な気分のまま、大学へ向かった。

結局、連絡も取れなかったし、今日も休みだったらどうしようと考えているうちに、大学に着いてしまった。

ドキドキしながら、教室に入り、ユウユを探してみた。

(いた!) なぜか凄く嬉しくなり、真っ先にユウユに駆け寄った。

「おはよー!」なぜだろう、私がこんなにもテンション高めで挨拶するなんて、自分でもビックリしていた。

「あつ、おはよー」逆にユウユの方が、いつもの私のようにテンション低めで、あまり目を合わそうとしない。

「???なぜだろう・ユウユがいつものユウユじゃない。

「ねえ、何かあった?」私もなぜか、一気にテンションが下降するのがわかった。

そこへ、アツちゃんとユウユが現れ、ユウユを見つけるなり「ユウユ・昨日どうしたの?連絡なしで学校休んだから、心配したんだぞ」といつもの感じで聞いてきた。

私も聞きたかったが、なぜかいつものユウユじゃない気がして、聞く事が出来なかった事を、二人がズバリ聞いてくれたので、少し助かった気分だった。

「ごめ〜ん、ちよつと実家に戻ってたんだ」

「えつ、なんかあったの?」

「うん、大したことじゃないんだけど、ちよつとね」少しはぐらかすように応えるユウユに、なぜか私は、不安感を増すばかりだった。

「メールしたのに、返事が来ないから、愛美なんか凄く心配してたんだぞ〜」

「あつ、愛美・ごめんね〜、え〜と、そうそう、携帯・アパートに忘れてっちゃったから」

「うん、いいだよ、携帯忘れたんじゃ返事できないもんね」と応えてみたものの、咄嗟に何か隠していると感じた。

授業中もユウユの事が気になって、集中出来ないまま、昼を迎えた。

そのまま学食へ向かおうとした時、前から分厚い本を数冊抱えた坪田先生が、こちらに歩いて来るところだった。

その横に、数人の生徒が楽しそうに先生と話しながら来る姿に、ちよつと腹立たしい気分を覚える中、先生が私たちに気づき、しばらく私たち・・・いえ、私の事を見ていた・・・ように感じたのですが、そんな事あるうはずもない。

そして、軽く会釈をしてすれ違った。

突然、横からアツちゃんに突かれた。

「愛美、あんた・・・」

「えっ、なに？」私は訳がわからず、アツちゃんに聞き返した。

「先生、ずっと愛美の事見てたよ」

「見てた見てた、確かに愛美の事見てた」とユウも会話に加わってきた。

「そっ、そんなことないよ」と私は否定する事しか出来ず、数人の生徒に囲まれて、楽しそうに話している先生の後ろ姿をちらっと見た。

「愛美、先生と何かあった？」

「え、まさか愛美と先生がね」とアツちゃんとユウが楽しそうに私をからかいながら、4人は学食へ向かったが、なぜだろう、いつもなら真っ先に絡んでくるユウユが、おとなしく私たちの後に付いてくるだけだった事に、ますますユウユに対して不信感が増してきた。

それとは別に、確かに先生は、私の事を見ていた・・・いったいあれはどういう事なんだろう。

ランチを終えた頃、アツちゃんとユウは2人で何かに盛り上がり

ている中、さつきから元気がないユウユが気になり「ねえ、元気ないけど、何かあった」と尋ねてみた。

「えっ？あつ、大丈夫・別に何でもないから気にしないで。それより、今日の晩御飯何にしようかなあ」と無理に明るく振舞おうとしている姿に、それ以上、何も言えなかった。

午後の授業が始まり、坪田先生のゼミだった為、授業開始時間より、相当早く教室へ向かった。と言うのも、人気のゼミだけに、早く行かないと前の席が取れないから・とアツちゃんはいつも気合を入れられている。そんなアツちゃんに、他の3人はただ、付いて行くだけだった。

教室に近づくなりアツちゃんは駆け出し、一足先に教室に飛び込んで行った。

やれやれという感じで、3人が教室に入ると、真ん中の列の前の方の席を、しっかりと確保しているアツちゃんがいた。それも変にニコニコして・まっ、いつもの事だからどうってことはないけど、なぜか笑える。

そして3人は、ゆっくりとアツちゃんの取ってくれた席に着いた。

昼休み後の授業は、とても辛い。春の陽気のせいもあるだろうか、睡魔に襲われる事も屢ある。でも、今日は特にきつい。昨夜、ユウユの事を考えていて、ほとんど寝ていなかったせいもあるから・・・瞼がどんどん落ちてくる。

これはいけないと思い、自分の手の甲を抓つかってみても、睡魔は去ってくれない。

おまけに、広い教室の為、マイクを使った授業だったので、そのマイクの丁度いい声のトーンが、余計に睡魔を誘う。

ガクツと首が落ち、ハツとして起きる・・の繰り返しだった。

（やだ〜どうしよう、先生の授業で居眠りなんて最悪〜）と思い、ふっと視線を上げた時、先生と目が合い、ドキツとした。おかげで

睡魔が吹っ飛んでいった。

(やばい・見られた) 凄く罪悪感を感じ、透かさず下を向いてしまった。

他の3人はと言うと、アツちゃんはずっと先生の事を見ているし、ユウは真面目にノートをとっている。そして、ユウは何をするでもなく、心ここにあらずという感じで、ボーとしていた。

(やっぱり何か変だ・) ユウに何かあった事は一目瞭然・でも、どうしたらいいのかわからない。悩み事とかあると、すぐに話してくれていたユウが、何も話してくれないなんて、絶対におかしい。

睡魔とも闘い、ユウの事も気になる中、なぜだろう、先生を見るたんびに目が合ってしまう。

(やだ、きつと居眠りしてたから、怒ってんのかな) と気になる事がもう一つ増えてしまった。

そして、ようやく授業も終り、皆が退出していく中、先生は資料とかを整理していた。その時、先生の手が止まり、私に視線を移し、そして我に返ったように目を逸らした。

なぜ先生が私の事を見るんだろう？なぜかその時、胸がキュンとした。

授業もすべて終り、いつものようにファミレスでお茶かなと思いつながら、校門へ向かい歩いていった時だった。

「愛美・ユウユ・ごめんね。今日、私たち2人用事があるから先に帰るんね」とアツちゃんとユウは帰ってしまった。

残された私とユウユは、なぜか気まずい雰囲気の中「ユウユ・お茶して帰る？」と尋ねてみた。

「・・・えっ・ごめんね、私もちょっと用事あるから帰るね」少し間をおいてからユウユは応え、バイバイと手を振り、帰って行った。

そんなユウユの後ろ姿がとても他人行儀に見え、急に淋しさを感じた。

じ、涙が出てきた。

「佐々木・・くん」

急に名前を呼ばれドキツとし、涙を拭い、振り返ると、そこに坪田先生が立っていた。

「どうしたの？何かあった」あの時と一緒にだった。あの不良グループに絡まれていた時と・・

「・・すっ・・すいません、何でもないんです・・ちょっと目にゴミが入っただけですから」と、いかにもみえみえな言い訳をしてみせた。

「そう、ならいいんだけど・・よかつたら途中まで送るよ」

「あつ、いえ・・大丈夫です、一人で帰れますから、ありがとうございます。さようなら」

私はドキドキしながら、軽く頭を下げ、一人で校門に向かい歩きました。

「あつ・・佐々木くん！」とまた後ろから呼び止められて振り返った。

「いや、実は君に、ちょっとお願いしたい事があったんだけど・・」

「えっ、私にですか？」突然の申し出に、私は少しビックリしてしまった。

「もし、君がいやじゃなければ・・ちょっとだけ私の助手をしてくれないかな？」

「またもびつくりして、私は目を丸くしていた。」

「えっ？何でわたしなんですか？」

「いや、あの、あ、あれだよ、別に君一人じゃなくてもいいんだ、友達も一緒をお願い出来れば助かるんだけど・・」

「でも、私なんかに出来ますか？」

「あつ・・ああ、簡単な手伝いだから、そんなに難しく考えなくていいんだ」

「あの、今返事しなくちゃだめですか？」

「いやいや、別にすぐって訳じゃないから、ちょっと考えてみてくれないかい」

「はい！わかりました」

「そう、じゃあよろしく・・・」そう言っただけで先生は帰って行った。

私は、なんだか夢のような心持になっていた。ちょっと前まで、淋しくて泣いていたのが嘘のように、気分が晴れやかになっていた。スキップでもしたいような気分のまま、校門を出て、ニヤけながら帰ろうとした時、前から歩いてくる人影が、真っ直ぐ私に向かって来た。

髪は白く脱色し、所々ピンクに染め、厚化粧のギャルが私の前で立ち止まった。

私は怖くて、その場で動けなくなっていた。

「あっ、あの～なんですか？」

目の前の女は、愛美を見つめたままだったが、しばらくすると、その目が少し潤んでいた。

「・・・久しぶり！」

「えっ？・・・だれ？」

「愛美・・・変わらないね」

「・・・あなた、もしかして・・・」

愛美の目にじわじわと湧き上がってくるものがあった。

「・・・沙織？」愛美の目から一粒の涙が流れ落ちた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7922h/>

LOVE GATE

2010年10月21日23時15分発行